

第16話 中国との交流

太子はまた中国と対等の交通を開いて、大いに国威を発揚された。

聖徳太子はこうして国内の政治をお改めになると共に、外国との関係に於いても、新たに中国と直接に交際の道を開いて、大いにその文化を取り入れられた。それがいかに大きなご功績であったかは、後の大化の新政のところになってよく分りますが、その御交際の態度においても、太子は大いに国威を発揚なされました。

中国との国交の始まり

前にも述べたように、これまでわが国の文化を助けた学問や工芸、仏教などは、すべて三韓を通して伝わって来たのですが、太子の時代に於いては、三韓からは既に大抵のものが輸入し尽くされていたので、更に大いに知識を求めるためには、その本元の中国に向かわねばならなかった。

それで太子は、推古天皇の15年に、小野妹子を使者として始めて中国にお遣りになった。勿論、これまでも、日本と中国との間には人同士の行き来は度々あったが、両国の朝廷の間で、公式に交際を開かれたのはこれが始めであります。

妹子は鞍作福利という帰化人の子孫を通訳に連れて、多くの従者と共に、はるばると中国に渡って行きました。勿論、その頃の船は極めて小さなもので、山のような大浪には木の葉のように揺られたことであつたでしょう。中国の大陸へ上陸してからでも、都の長安までは可なり遠くでした。

その頃、中国は久しく幾つもの国に分裂して乱れていたのが、統一されて国号が隋という名の時でした。その時の皇帝は、舟遊びのために長さ1200kmもある運河を掘らせたという言い伝えなどで有名は煬帝でして、国の勢いが非常に盛んでしたから、他の国々をみんな属国か何かのように思っで見下していました。

わが国書、対等の礼

妹子はやっと長安の都に着きますと、携えて行った国書(すなわち天皇のお手紙)を差出しました。煬帝はこれを読ませて見ると、その書き出しに、「日出づる処の天子、書を日没する処の天子に致す。恙無きや」と書いてあります。その意味は、「日の出る東の方の日本の天子が、書面を日の入る西の方の中国の天子に差上げる。お変わり無いですか」というのでありますが、取りように依っては、「日の出の勢いの日本の天子が、書面を日の落ちるように衰えた中国の天子にあげる」という意味にも聞こえます。

属国同様に思っていた小さな国から、対等でも無礼と思っているのに、一段下におかれたようにでも感じたのか、煬帝は大いに怒って、その手紙を受け取ろうとしませんでした。しかしわざわざ使者となつて来た妹子が、それでは役目が足りぬというので、いろいろと骨を折ってやっとな受け取らせたということとです。

第16話 中国との交流

翌年、妹子の帰る時に、隋の使者が妹子を送って日本に来たが、その使者が帰る時に、妹子は再び大使として隋に遣わされた。この時の国書には、「東の天皇 敬んで西の皇帝に白す」と書かれました。

いかにも聖徳太子が国家の体面を重んぜられて、相手が大国でも少しもその勢いに恐れられなかったのが分ります。

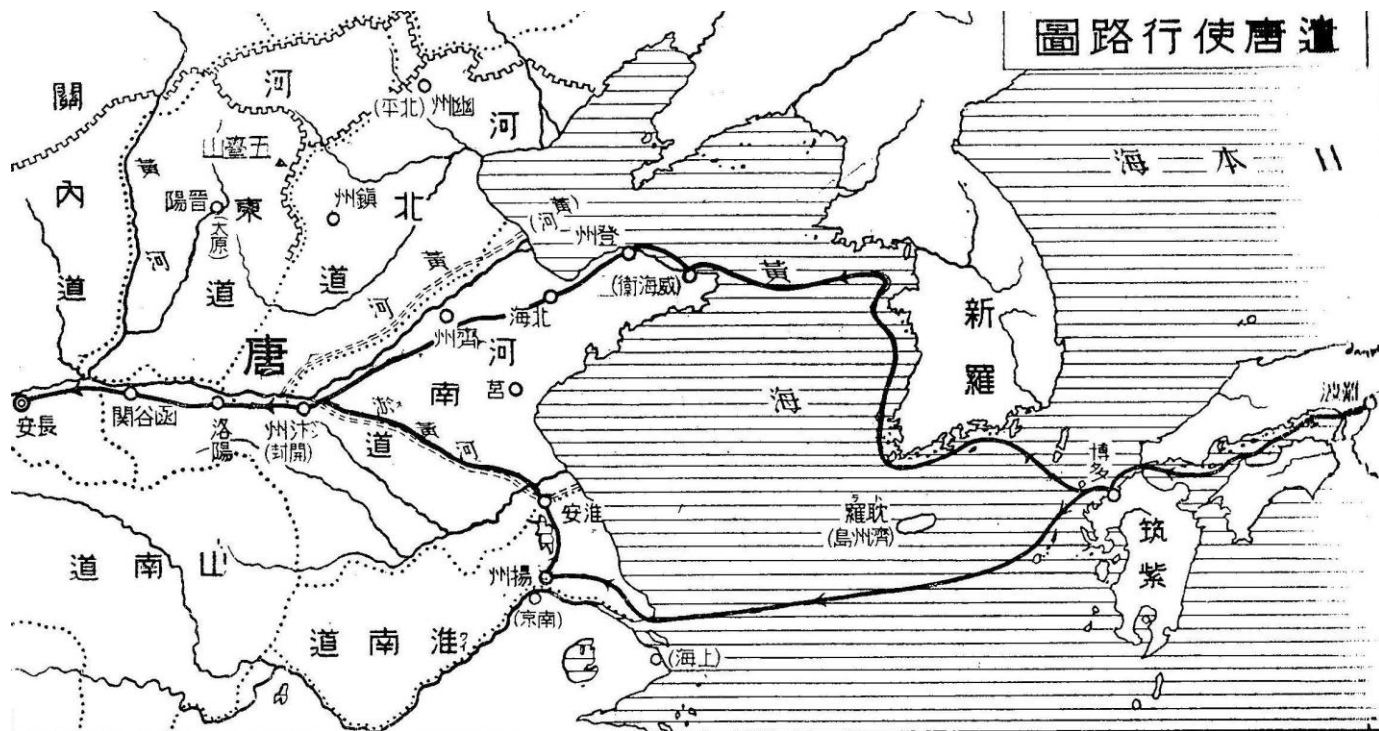
最初の留学生

この第二回の遣隋使を遣られる時に、太子は高向玄理、南淵請安、僧の旻らの八人を大使に従わしめて、かの地に留学させられた。これがわが国の最初の留学生です。翌年、大使の妹子は帰朝したが、留学生は後に残っておのおのその好むところを勉強しました。中には20年も30年もの地に在って、その進んだ制度や文物を研究して帰って来たものもありました。これらの人々がいかにその新知識を以って国家のために尽くしたかは後に述べます。

遣唐使の始

間もなく隋は推古天皇の26年に滅んで、唐の世となったが、わが国と中国との交通はその後ますます繁くなりました。第34代舒明天皇の御代に、始めて犬上御田鋤を唐へ遣わされてから、第59代宇多天皇の御代に派遣を停められるまでの250余年の間に、遣唐使は前後14回も送られました。

従って学生や僧侶の留学する者もますます多く、進歩した唐の学問や技芸を盛んに伝えて、わが文化を大いに助けたが、これもみんな聖徳太子が初めて隋へ使者をご派遣になったのが本になります。



太子のおかれ

さて、太子はこうしていろいろの方面に立派なご功績をお挙げになりましたが、摂政をなさること29年、まだ御位にお即きにならぬ前に、御年49でお薨れになりました。実に推古天皇の29年2月です。その時の天皇のお歎きは申すに及ばず、諸王、諸臣から一般の国民に至るまで、まことの父母を

第16話 中国との交流

喪^{うしな}ったように悲^{かな}しんで、「日も月も 光^{ひかり}を失^うって、天地^{てんち}も崩^{くづ}れそうだ。 ああ、今から後は誰^{あと だれ}を頼^{たよ}りにしたらよいのか！」 と言^なって泣^ないたということでもあります。 いかに太子^{こうとく}がそのご高德^{した}を慕^もわれていたかが分かります。

(第16話 中国との交流 終わり。 次は前頁に戻り、 第17話 蘇我氏の滅亡^{そ が し めつぼう} へ)